

鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ (36)

比類なき研究書

フックス著『鬼龍子』

前橋市 富山 弘毅

中国建築に特有の鬼瓦＝鬼龍子についての研究書を書いたのは、ドイツ人文化史研究家のエードワルト・フックスでした。

明代の鬼龍子をたくさん収集して研究し、なかなか含蓄のある文章と多くの写真を載せた『鬼龍子（中国の鬼瓦）』をアルベルト・ランゲン社が発行したのが約90年前の1924年。それを翻訳して日本語版を刀江書院が発行したのが半世紀前の1964年でした。このテーマでの研究書は貴重で、類例がないようです。

刀江書院の編集部が翻訳、挿絵説明と参考文献翻訳は東京工業大学の中原稔生氏、考古学者で1957年に『半瓦当の研究』（岩波書店）で文学博士号をとった東京大学の関野雄（たけし）氏が中国文化・芸術の専門領域に関して監修したので、訳語などは十分吟味していると思われます。

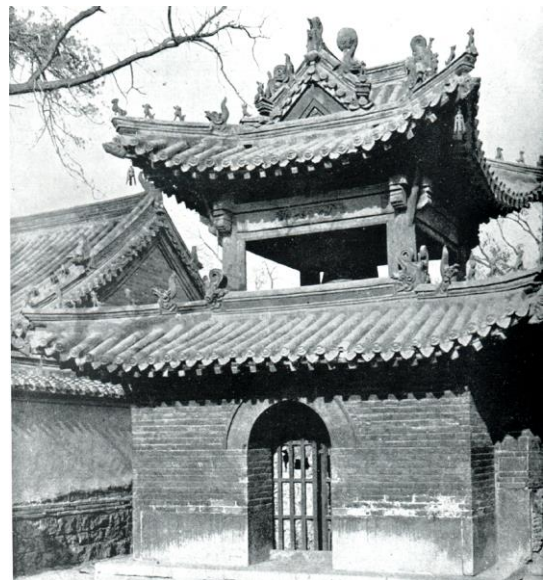
明代に絞って研究対象にしているという限界はあるものの、教えられるところが多大了。鬼瓦にかかわる私の関心に触れる部分を、断片的に抜き書きしてみましよう。



○「鬼龍子」とは、中国の屋根によく飾られている動物や人間の姿の多種多様な形やその組み合わせを総称したもの。建築物に課せられている特殊の生理心理的任務を果たしている。

中国の屋根

○中国の建築様式では屋根が真っ先に人の目に飛び込んでくる。
○いわゆる華表（記念柱）にさえ、中国ではしばしば屋根がつけられる。中国人の建築の最高理想は、屋根の構造において



フックス『鬼龍子』第2図 済南府の火神廟の鐘楼。多様な鬼龍子がたくさん並ぶ。

頂点に達している。

- 中国は、荒廃的な大嵐や何日も続く豪雨に襲われる国だ。中国の屋根の独特な形や構造は、自然に強制されたこれらの条件に、よく適している。
- 板葺き屋根から瓦屋根へ移り変わったのは、おそらく紀元前4世紀のことだと、一般に想定されている。…それ以来何百年にわたって全アジアの唯一の屋根瓦供給国であった。
- 鬼龍子は守護神、その屋根の下に住む人びとの保護者以外のなにものでもない。
- 屋根が中国人の想像力のもっとも重要な形態観念の一つになった。

中国人の宗教的観念

○中国でも最古の宗教段階はアニミズム、すなわち万有精神説である。…中国人の観念では霊のないものは絶対に存在しない。…どの物にも特別な霊がある。

- 屋根の力を強めるためにアニミズム的な考えで構成された守護部隊の主力を、破風や棟に沿って載せられた鬼龍子の形で配置するのである。
- 鬼龍子の色も、決して意味のないものではない。色も、中国人の観念では特別の霊を持っている。（拙稿 32 参照）



フックス『鬼龍子』第22図 雲上で威嚇的な姿勢をしている悪鬼。多彩釉—緑、黄、黒。



フックス『鬼龍子』第23図 拳を固め、顔を前に突き出している悪鬼。多彩釉—緑、黄、褐色、黒。

- 中国人の宗教は現世宗教であるから、幸福をもたらすのは常に物質的な、目に見えるものだけである。すべての守護象徴物を、したがって鬼龍子をも、はっきりと示威的に飾る風習が発生している。鬼龍子はいつも目立ちやすいところに飾られている。

鬼龍子の象徴的な意味

- 鬼龍子の形で特によく見かけられるものは、龍、鳳（鳳凰）、仏犬（麒麟、天犬、犬獅、龍と狛犬を結合させたもの）、空想動物、馬、兎、雄鶏、千鳥、海豚。学者、聖者、悪鬼、軍神、馬上の英雄など。首位は龍。
- エルンスト・フルマン著『宗教における動物』に、「龍が太陽を征服するときには、雷と稲妻を用いて征服した。そこで中国人は小さな龍を屋根の端にすえて、この龍に屋根を襲う稲妻を避ける助けをしてもらったのである。龍はすでに昔から金属でつくられたが稲妻が家に触れずに地上に伝わって、…すでに何千年も前から避雷針の原理を実地に応用していたということもありうる」。
- 鳳（鳳凰）は皇后の紋章獣。…しかし、疑問を投じておきたい。それは、この作品が果たして鳳であるか、むしろ、やはり鬼龍子に使われる動物の一つ、雄鶏の象徴ではないか、ということである。雄鶏は太陽の化身で、その鳥冠は太陽の後光だとされている。雄鶏はさらに、公正な裁判官の象徴であり、悪霊に対する警告者であり、その鳴き声でその悪霊を追い払うのである。
- 悪鬼には直接、悪霊にたいする衆生守護者の任務が与えられている。…観音は、仏陀同様、決して鬼龍子には使われていないが、中国の考え方では、観音はしばしば悪鬼に姿を変える——このように化身するとますます効果的に衆生を守護できるため——と考えられている。悪鬼は観音の化身と考えてよいであろう。

○工芸は明代にその全盛を経験し、…陶磁製作においてヨーロッパではかつて到達したことの無い完成を見た。明代の製陶術が、鬼龍子において無条件に不滅の表現に到達した。…鬼龍子の名声の一つは、それが純粋な民芸、無名の民衆の芸術であることも軽視できない。



誤認もあるが権威書

フックスの文中には明らかな誤認と思われる部分もあります。

たとえば「帝王の宮殿のたいていの屋根は黄色の瓦で葺いてある」と書いた3行あとに「帝王の宮殿の屋根瓦もたいてい緑色と青色をしている」と書いています。

また「日本の有名な寺院や建物の瓦も、たいてい、中国から来ている」と記述していて、飛鳥時代に百済から瓦博士が到来した前後から瓦製造技術が急速に発達した日本の歴史を知らないようです。

さらに「無色の鬼龍子には出会ったことがない」「明代初期以前の鬼龍子は今日まで知られていない」などの記述にも、首を傾げたくになります。

したがって、この本のすべてを信じるわけにはいきませんが、鬼龍子についての彼の見解を否定したり乗り越えようとしたりするような書物も見当たりませんので、一定の権威があると考えられます。

フックスが載せた58枚の写真のうち、説明文に「悪鬼」とあるのは2枚だけで、他に「鬼」の文字は見当たりません。この「悪鬼」は、我々の鬼瓦や鬼のイメージとは程遠いものです。「悪鬼は観音の化身」という彼の説からすれば、当然でしょう。

鬼面文鬼瓦は一つも載っていません。

日本の鬼龍子 湯島の聖堂

「鬼龍子」という言葉は『広辞苑』に「中国・朝鮮建築の下棟（くだりむね）に立たた龍の子を模した瓦製怪獣」とありますが、

他のほとんどの辞書や百科事典には載っていません。

日本での鬼龍子の実例といえば、何といっても東京・御茶ノ水の湯島聖堂です。

湯島聖堂は、1690年（元禄3）5代将軍徳川綱吉が創建、孔子廟＝大成殿に明の遺臣・朱舜水が中国から携えて来た孔子像を祀りました。1797年（寛政9）に幕府直轄学校の昌平坂学問所が併設されました。

孔子（BC.552～BC.479）は周知のように中国・春秋時代の魯の人です。

3度の江戸の大火と関東大震災で何度も全焼した湯島聖堂は1935年に復興されました。木造であった大成殿を鉄筋コンクリート造りにし、建物内外を黒色のエナメルペイントで塗りました。



青銅製の鬼頭（きぎんとう）
東京・御茶の水 湯島聖堂 大成殿 大棟西

そして、入母屋造りの屋根には大棟両端に青銅製の鬼頭（きぎんとう）を載せ、降り棟及び隅棟の止端には青銅製の鬼龍子（きりゅうし）を置きました。1799年（寛政11）に鑄造されたものが関東大震災で焼け落ち、復元されたもので、これらの設計は東京大学の伊東忠太教授です。

鬼犹頭は一種の鯢(しゃち)で龍頭魚尾、二脚双角、潮を吹き上げ、外方を向いています。鯢はもと鴟尾(しび)で、漢代にはじまり五代・宋のころに魚形に変化したとされる想像上の神魚。水の神として火災を防ぐため祀られるとされます。



湯島聖堂 大成殿 鬼龍子

湯島聖堂の解説文によると、ここの鬼龍子は「猫形蛇腹」で、牙があり、形が猫に似ており、腹には鱗があり蛇腹となっていて、聖人の徳に感じて現れる霊獣だとしています。鬼犹頭も鬼龍子も、日本では珍しいものです。

湯島聖堂の岩城公子主事が、鬼龍子の他の例は日本では見つからないが、鬼犹頭は会津若松の会津藩校日新館に載っていると、教えて下さいました。

伊東忠太氏が制作した想像上の動物の豊かさは驚くほど。『伊東忠太動物園』(筑摩書房 1995)は示唆に富んでいます。

なお、湯島聖堂の表門に当たる仰高門とその袖の塀の屋根に鬼瓦が載っています。ただし銅製です。大成殿だけでなく杏壇門、入徳門、神農廟、孔子像などすべてが中国風なのですが、この門だけ純日本風で鬼瓦が載っているのは面白いものです。

江戸時代の官学の府であった聖堂では漢文講座を中心とする多種の文化講座が行われていて、「漢字検定必勝祈願」の願掛けをする人もかなりいるようです。

私の父・富山昇の恩師であり、大漢和辞典を編纂した諸橋徹次氏の色紙も、聖堂の斯文(しぶん)会館に飾ってありました。



湯島聖堂 仰高門 大棟東 鬼瓦(銅製)

清代の鬼面文鬼瓦は？

將軍・綱吉が中国流の孔子廟を造らせたころは、中国は明の次の清の時代でした。

清代の鬼瓦はほとんど知られていませんが、わずかに知ることができたのは、『椽檐遺珍』中国古代瓦当鑑賞(山西人民出版社)という書物によってです。ここには多数の古い瓦当、半瓦当が掲載され、その中に2点、清代のものがあります。



(上・下とも) 獸面紋瓦当 清代
「椽檐遺珍」中国古代瓦当鑑賞(山西人民出版社)より

(つづく)